

Title	デス・エデュケーションのすすめ
Author(s)	山川, 一成
Citation	大阪大学臨床老年行動学年報. 1 p2-p.7
Issue Date	1996
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12290
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

デス・エデュケーションのすすめ

山 本 一 成

「私たちがどうしても見つけていることができないものがある——太陽と死と。」
フーコー

I. はじめに

阪神大震災によって、今まで平和な繁栄の中で築いてきたものが、一瞬の内に破壊されただけでなく、昨日まで元気だった人々が瓦礫の下で帰らぬ人となってしまった。私たちは普段いつかは自分にも死が訪れることを知っているが、それはいつかであって、決して今日や明日ではないと信じている。それが今回の大震災で、多くの人は、自分もいつ本当に死ぬかわからないということを実感したのではないだろうか。被災地に足を踏み入れた人の多くが、人生観や価値観が変わったという。私たちは、死を実感する時、生命や人生の意味を改めて問い直される。

一方、今日では大多数の人が病院で死を迎えるため、人々の目から死は遠ざけられてしまっている。特に、子どもたちは死について学ぶ貴重な機会を奪われている。また、世間では、死を話題にすることはまだまだ忌むべきこととされている。そのため、こころの準備のないまま死を迎える人が多いように思われる。もっと早い時期から、死のことを考え、こころの準備をしておくことが大切ではないかと感じる。万が一の火事に備えて消火訓練や避難訓練はするのに、必ず訪れる死に対して何も準備しないのは矛盾しているのではないだろうか。

柏木は、『死を学ぶ』のなかで、次のように述べている。「病気で死ぬといういわば自然な死が病院の中へ閉じこめられている一方で、地震による大量死や有毒物質による死のような異常な死が日常生活の中に突如侵入してくるという時代に私たちは生きている。この意味では、私たちは日々死を背負って生きているのである。それゆえ、私たちは人間の死を意識的に学ぶ必要がある。すなわち『死の教育』（デス・エデュケーション）が今後ますます必要になってくるであろう。」

このように今後重要になっていくと思われるデス・エデュケーションについて考えてみたい。

II. 子どもと死

子どもたちが死について考えたり、悩んだりすることを想像するだけで、私たちは不安になる。私たちは、なるべくその様なつらい事実を、子どもたちから隠しておきたいと思う。しかし、一般に、大人は子どもの受容能力を過少評価しているのではないだろうか。ホスピスでの経験から言うと、子どもは大人が考えているよりずっと死を受容する力を持っている。筆者は、両親が子どもに隠していた死を、両親の承諾のもとに、親の死が近いことをその子どもにわかりやすく説明したことがあるが、その子なりにしっかりと事実を受けとめていた。もちろん、説明後、回りのサポートが必要であるが。

あるイギリスのホスピスでは、死が近い患者の子どもがまだ小さい場合、一冊のぬり絵をその子どもに渡す。そのぬり絵に、自分のお父さん又はお母さんである患者とのこれまでの思い出や子どもの目から見た現実の姿などを描いていく。そのような過程を通して、その子どもは父親又は母親の死に対する心の準備をすることが出来るのである。

震災や事故などで、親や兄弟などの突然の死を経験した場合は、前もって心の準備をする時間的余裕があった場合に比べて、はるかに死を受け入れることが困難である。今回の阪神大震災は、信じられないほどの被害をもたらした。神戸のような近代都市が、一瞬のうちに瓦礫の山と化し、5000人を越える生命が奪われた。その中には、幼い子どもたちもふくまれていた。この大震災によって被害を受けた子どもたちを心理的に支援するために作成された小冊子がある。これは、もともと北海道南西沖大地震で被災した子どもたちのために藤森らの手によって作られたものである。その一部を抜粋する。

- ① 子どもたちの死について冷静であってはいけません。教室で反応を共にしましょう。
- ② 子どもたちに自分の感情について話をさせたり、書かせたりしましょう。
- ③ 子どもがいうことには、何でも耳を傾けて下さい。決して話をさえぎってはいけません。

- ④ 子どもたちの死に関する詳細を、そのクラスのみなが知っていることを目指しましょう。
- ⑤ 幼い子どもたちに死のことを「永遠に眠ってしまった。」と説明してはいけません。眠ることと死ぬことの違いを理解させる授業づくりを試みて下さい。命の大切さを学ぶことは、「死」を教えることなので。死という事実は、子どもたちに自然な形で、親切に教えらるべきです。木々や草花は夏に花が咲き、秋や冬に散ります。このことが命の連続を明らかにしてくれ、命とは成長し死ぬための時間であることを説明してくれているのです。
- ⑥ 悲しんでいる子どもたちに、「規則的な一日」を押しつけてはいけません。子どもたちには、手紙、日記、討論のような行動の選択を与えて下さい。しかしそれは、クラス全体が秩序を崩して良いことではないことを、子どもたちにしっかり伝えてください。
- ⑦ 高学年の子どもたちは、この災害に関係のあることについてもっと具体的な表現を望むでしょう。亡くなった生徒の記念となるもの（記念の文集やアルバム、ビデオ、慰霊碑など）の制作のために、子どもたちが協力して活動することを手助けしましょう。
- ⑧ 葬儀の礼儀作法に関する適切な指導をし、遺族への訪問をしましょう。
- ⑨ 親や家族を失った子どもたちに対し、どのように接するかを説明して下さい。その子どもたちを避けようとしたり、過度に気づかたりすることは援助ではないことを強調して下さい。普通の関係を取り戻す必要性を指摘して下さい。

このようなデス・エデュケーションが、全国の小学校で日頃から行われていけば、子どもたちにとってまたその親たちにとって、どんなに助けになるだろうと思われる。しかし、残念ながら、日本では今のところ学校教育の中に死はとりあげられていない。子どもに死に関する知識を与えるという考え方には抵抗が多い。子どもに死について教えることはショックを与えるだけだからなるべくそっとしておいた方がよいと考えられている。おそらく家庭でも状況はそんなに変わらないだろう。

『死ぬってどういうこと？ 子どもに「死」を語るとき』の著者であるアール・グロルマンは、次のようにべている。「死に接したときの子どもへの対応をなおざりにすると、子どもは現実をしっかりふまえることができず、ますます不安をつのらせます。頭のなかで考えを飛躍させ、自分を守るための心の砦を築き上げてしまうのです。・・・愛する人と死別することは長く苦しい道のりです。しかし、子どもはその道を歩きながら、人間としての幅を広げていきます。そのなかから愛すること、

相手を思いやること、理解することを学ぶのです。」そして、身近な人の死を体験した子どもに接するときの親の心構えとして、1)「死」という言葉をタブー視しない、2) 悲しい気持ちは年齢に関係なくすべての人に共通しているのだという認識を持つ、3) 子どもの気持ちを素直に表現させ解放させる、4) 家族のひとりが亡くなったことを学校の先生に知らせる、5) 子どもへの対応に自信がないときは他に相談してみる、6) 子どもに死んだ人の生まれ変わりだといったたぐいの話をしない、7) 目先をごまかすような架空の作り話をしない、8) 親の説明が絶対に正しいと思ひこませない、9) 親も悲しい気持ちを素直に表現する、10) あふれる愛情で子どもを支え続ける、といった項目をあげている。

子どもからの死についての質問には、誠実に答える必要がある。残念なことに、多くの大人は、子どもの質問をはぐらかしたり、すぐに話題をそらしたりするが、これは望ましい態度ではない。子どもは、死を必要以上に恐れたりせず、事実を素直に受け入れるものである。むしろ子どもは、大人が死についての話を避けたり、押し止めたりするのを見て、その話題が避けるべきタブーであるという固定観念を身につけてしまうのである。このような誤った対応は、子どもが後に死に対していきすぎた恐怖を抱くといった結果に結びつきやすい。私たちは、何も言わなくても何もしなくても、無意識的に、子どもたちに何かを教えているのである。

キューブラー・ロスが子どもたちに死について教えるとき、手作りの特製のぬいぐるみを用いる。それは、青虫のぬいぐるみで、今生きているのはこのような姿だが、死んだらこのような姿に変わると説明しながら、青虫の背中ファスナーを開けると、中から美しい蝶が現れる。子どもたちは、豊かな想像力を持っているので、それを見て死とはどのようなものかということを理解することが出来る。それは、子どもたちに恐怖を与えることなく、死についての真実を教える見事なやり方である。筆者は、ある講演会でキューブラー・ロスがそのぬいぐるみを使って実演して見せてくれたとき、感動したのを覚えている。

III. 大学生と死

筆者は、人間科学部の学生（2回生）に対し、心理学実習のなかで、死について考える機会を提供している。死生学（サナトロジー）についての概論を講義した後、デス・エデュケーションに関するビデオを観賞する。その後数人のグループに分かれて、安楽死など死に関連する様々なテーマやデス・エデュケーションについて自由に討論する。後日、その討論をもとにレポートを提出してもらおう。使用したビデオは、アルフォンス・デーケン

の「死を見つめる」、「自分自身の死をまっとうする」、「さまざまな死に学ぶ」などである。

大学生という死とは無縁の20歳前後の青年が、死をどう考えているのか、他の人たちの意見を聴いて何を感じたのか、その感想を紹介したい。まず、実習についての感想は、以下のものであった。

「今回の実習を通して、死についてあらためて考えさせられた。そして、他人の意見も聞くことが出来た。テーマが死という深刻なものだけに、普段軽々しく他人に尋ねることが出来ないで、今回のグループ別討議は非常に有意義であった。自分と同じように考えている人がいて安心したり、自分とは異なる考えを聞き、自分の考えをさらに広げたりすることが出来た。」

「今回の実習は、普段から自分が非常に興味を持っているテーマだったので、とても興味深く積極的に参加することが出来た。ディスカッションの時には、『今から死ぬことを考えるなんておかしい』という、自分と正反対の立場の人もいて、普段日常の会話では、こう言ったことはとても話題になりにくいことでもあるし、いろいろな人のいろいろな意見が聞けて、とても面白かった。」

「今まで死を実感したことはなかったが、ビデオを見てみんなとそれについて語る内に、自分の死についての考えが変わってくるように思った。ぼんやりとした自分からとても遠いものであったが、それが急に自分の周りにも、そして自分自身にも関係するとても身近なものに思え始めた。しかし、私はまだ若い。病気も特に持っていないしやはり自分が死ぬ、というのはまだまだ遠い先のことに思える。そんな私は今回のディスカッションで死を静かに肯定的に受けとめる気持ちになった。」

「・・・このような死に対する人々の関心を実際に学問として役立っているのが臨床老年行動学であると思う。確かに死ぬまぎわに、自分が死ぬのだという絶望感でいっぱい状態で死ぬよりは、自分の人生を振り返り、その評価や総決算を行って死を受容して死ぬ方が幸せであると思う。また、この学問を通して、今生きている自分を見直し、死のまぎわに自分の人生を振り返って悔いのないように生きようという決意が現れたりすると思う。」

このように、この実習に参加した学生の多くは、死について考え、互いにディスカッションしたことは有意義であったと評価している。

次にデス・エデュケーションについての意見を紹介する。

「死について考えるというのは非常に重い問題である。死の問題はその内容の重さもさることながら重要度も大きい。死が人生の最後だという認識は認識することは出来ても本当に理解するのは非常に難しいという良

いだろう。だからこそこのようなデス・エデュケーションが人間科学部に限ってではなく、より一般的に行われるべきであろう。」

「・・・正直私は、デス・エデュケーションなんて必要ないと思っていた。『死ぬ時は死ぬんだ』という感じが強かった。でも、必要性を否定しようとしたこのレポートでデス・エデュケーションが必要であることがはっきりとわかった。『死』があるから我々は『生きる』ことできるのだ。」

「あらためて自分の人生の中での死について考えてみて、自分にとって死がいかに現実感がないものであるかに気づいた。今のような状態で身近な人の死や、自分の死の可能性に直面したとしても対応するすべを失ってただ当惑するのみだろう。誰のためでもなく自分のために Death Education を受けてみたいと思った。」

「・・・本当に自分が人の死に触れる機会は少なかったように思う。かぶと虫やざりがに、亀などを飼うのが好きだったのでその他の生き物の死には数知れず触れてきたが。その時、いつ覚えたのかわからないが、生き物が死んだらちゃんと穴を掘って埋めていた。現代のように直接死に触れる機会の少ない社会では、Death Education によって死について考えるのは大事なことだと思う。」

このように、デス・エデュケーションについても、肯定的な意見が多かった。

一方、つぎのような否定的意見も見られた。

「・・・やはりまだ死を身近なものとして感じる年代ではないからだろうか、討議といっても目立ってこれ、というような意見もなかった。・・・死を語る際に一種の不安を感じる場合もあるが、『死』≠『自分のこと、自分のみに必ず起きること』という意識が強いからだろうか、どちらかといえば明るいイメージの答えが多くあげられる傾向にあるように思う。」

「正直な感想を言うと、『まだハタチにもなっていないのに死について考えられるかいっ』という感じである。デス・エデュケーションの必要性はある程度認めるが、私自身には効果が薄いようだ。」

「・・・死を受け入れられるようになるためには、宗教やデスエデュケーションの力を借りるのもよいが結局、死について考えるのは自分自身である。“Education”-教えること-では死の不安を拭い去ることは出来ない。また若者に死を受け入れる覚悟を持たせるのは無理であると考えた。」

20歳前後という年代は、若く生命力にあふれており、死を自分のものとして実感することは、困難のように思われる。

今回の阪神大震災に関連した感想も見られた。

「・・・もうすぐ半年が過ぎようとしているが、阪神大震災も『人の生死』に目を向けさせられた出来事の一つである。神戸・西宮にすむ友人・先輩の安否を思っでは、もどかしい思いを感じた。しかし、現在では生死の狭間から立ち直りつつ、それどころかより強く生きている人々に脱帽の意を感じ、人の強さを感じずに入られない。」

「今回の兵庫県南部地震で、私が家庭教師をしていた女の子が亡くなった。今でもまだ実感がなくらいである。人の死がいつ来るかわからないということをあらためて知った。死について考えることは、日本ではタブーとされているが、自分自身の将来について前もって考えておくことは、自分に責任を持つという意味でもあるし、当然であろうと思う。」

「私は戦争や災害、事故などで精神にダメージを負った子どもの立ち直りに興味を持ち、それに参加したいと考えている。阪神大震災でその希望はますます強まったが、将来そういった子ども達が成長し、その国や世界を作っていくこと考えると出来るだけ心身ともに健康な子ども時代を送って欲しいと思う。子どもをとりまく様々な環境の中で死に抑圧されない、けれども生を軽んじることもない子どもを育てていくことを目指したい。」

一般に、大学生はほとんど死に関心を示さないと言われているが、以上に紹介したように、この授業を受講した学生は、死に関心を示す人が以外に多かった。これは、人間を心理、行動、集団、社会、教育、文化などの視点から研究する人間科学部に属している学生たちが対象であったからかもしれない。

IV. デス・エデュケーションのすすめ

「いじめによる小中学生の自殺が相次ぐ中、死の意味を子供たちに考えさせ、生命の尊さを学ばせるデス・エデュケーションを導入しようという声が高まり、医学、教育関係者らの間で『デス・エデュケーション学会』設立の計画が進んでいる。」このような記事が今年（1995年）初めの新聞に掲載されていた。いま学校教育の中で、生命や死の意味、どう生きるかなどについてじっくり考える時間が必要であると思う。

日本の教育水準は、世界でもトップレベルにあると思われるが、デス・エデュケーションに関しては、遅れていると言わざるを得ない。北米やヨーロッパのいくつかの国々では、年齢に応じたデス・エデュケーションが行われている。死は人生の一部なので、本来は日々の生活の中で自然に教えられるのが望ましいと思われる。そうすれば、わざわざデス・エデュケーションというような

堅苦しいことをいう必要はないであろう。しかし現実にはそれがなされていないだけでなく、この社会は死を否定する社会であるから、子どもたちに不自然な誤った死の観念を植え付ける場合も少なくない。

デス・エデュケーションは、一般に「死の教育」、「死への準備教育」、「生と死の教育」などと訳されている。デス・エデュケーションは、将来訪れる死に対して準備を行うことを目的とするだけでなく、生きる意味や生命のかけがえなさを学ぶことなどを通して、現在の生をよりよく生きること、またまわりの人を大切に支えあって生きることを意図している。この教育は、青少年時代だけでなくあらゆる世代に必要であって、生涯教育のプログラムの中に盛り込まれるべきであろう。

A. デス・エデュケーションの目標

わが国においてデス・エデュケーションを積極的に推進しているアルフォンス・デーケンが、デス・エデュケーションの15の目標を掲げている。

1. 死へのプロセス、ならびに死にゆく患者の抱える多様な問題とニーズについての理解を促すこと。そうすることによって、私たちは人生最後の段階にある患者に対し、よりよい援助を提供できるようになる。
2. 生涯を通じて自分の死を準備し、自分だけのかけがえのない死を全うできるように、死についてのより深い思索を促すこと。
3. 悲嘆教育（グリーフ・エデュケーション）。身近な人の死に続いて体験される悲嘆のプロセスとその難しさ、落とし穴、そして立ち直りに至るまでの12段階について理解することをめざす。
4. 極端な死への恐怖を和らげ、無用の心理的負担を取り除くこと。
5. 死にまつわるタブーを取り除くこと。それによって、死という重要な問題について自由に考え、また話すことできるようになり、死に結びついた情緒的問題の解決も可能となる。
6. 自殺を考えている人の心理について理解を深めること、また、いかにして自殺を予防するかを教えること。
7. 告知と末期患者の知る権利についての認識を徹底させること。この目標は、末期患者とのコミュニケーションの問題と深く関連している。
8. 死と死へのプロセスをめぐる倫理的な問題への認識を促すこと（例として、植物人間、人工的な延命、消極的・積極的安楽死などが挙げられる。）
9. 医学と法律に関わる諸問題についての理解を深めること（例として、死の定義と死の判定、脳死、臓器

- 移植、医学研究のための献体、腎臓の遺贈、アイ・バンク、遺言の作成、死後の家族援助などが挙げられる)。
10. 葬儀の役割について理解を深め、自身の葬儀の方法を選択して準備するための助けとすること。
 11. 時間の貴重さを発見し、人間の創造的次元を刺激し、価値の見直しと評価を促すこと。
 12. 死の芸術を積極的に習得させ、第三の人生を豊かなものとする。この意味で、サナトロジー(死学)は老年学の大切な一分野と考えられる。
 13. 個人的な死の哲学の探求。そのめざすところは、文化的・教育的背景によって制約された死に関する社会的・心理的・イデオロギー的固定観念から人間を解放し、各人が死について自分なりの個性的な理解を自由に選ぶことが出来るよう積極的に援助することである。
 14. 宗教における死のさまざまな解釈を探ること。その際、生きがいと死にがいの相互関係についても考察する。
 15. 死後の生命の可能性について積極的に考察するよう促すこと。その際、根源的希望が現在の生活に占める重要な役割を理解する。

B. デス・エデュケーションの方法

デス・エデュケーションにはいろいろな方法が考えられる。幼年期から老年期に至るまで人生の様々な段階においてデス・エデュケーションがいかになされるべきか、若林による「アメリカにおけるデス・エデュケーション」を参考にして、その方法をいくつか提示してみたい。

1. 子どもに対するデス・エデュケーション

ある研究によると、3歳から5歳までの子どもは、死を眠りのように一時的なものととらえ、死を理解していない。6歳から9歳になると、一度死んだら決して生き返ることはないと認識するようになるが、死が自分をも含めたすべての人々に等しくふりかかるものだとは依然として認めようとしない。10歳以降になって初めて大人と同じように死の絶対性と普遍性を受け入れるようになるという。したがって、子どもの年齢、学年に応じた学習方法が採られなくてはならない。

5～6歳以下の子どものには、まず生命の誕生、成長、死といったものが、一つのサイクルの中で起きることを説明する。植物の種、枯れた花など自然のサイクルの観察を通して学ぶ。時によっては墓地を訪れ、「墓石の意味」、「なぜ墓参りをするのか」、「花を飾ったりするのはどうしてか」など、子どもたちに自由な感想を述べさせる。

小学校2～3年生の子どもに対しては、生物的なサイ

クルの中で、人間の死について触れる。魚、植物、水といったものの生態系の観察する。それぞれの家族の協力を得ながら、新聞や雑誌の死亡記事のスクラップブックをつくり、死に至る原因を調べたりする。感情表現としては、泣き叫びたい気持ちを絵に描いたり、死のイメージをやはり描いてみたりする。葬儀屋への見学も考慮する。

4年生以上段階の学習目標は、「死」という現実が、子どもたち自身の問題であり、自分との関わりにおいて理解、認識されるよう指導されていく。たとえば、現代人の死に場所(病院、老人ホーム、ホスピス、家庭)についての正確な情報を与え、それぞれについて思いを述べ合う。子どもたち各自の死の体験(ペットの死も含めて)と、そのときの気持ちを話してみたり、書き残していく。死をテーマにした歌を歌い、そのときの気持ちを表現する。未知の物に対する恐怖の感情は不自然なものではないことを教える。詩や音楽、芸術活動に、感情を昇華させる手段のあることを教える。テレビで、ある番組がある一定期間見てどんな人が死んだか、どういう理由(殺人、病気、事故など)か、その死は現実的だと思うかなど感想を出しあう。

2. 中・高校生のためのデス・エデュケーション

死に関する法律や科学的な見解についても学ぶ。死に対して法律はどのような立場をとるのか、医学では死をどう判定するのか、など。文学作品を通して死の問題を考えるのも効果的な学習法の一つである。

学年がすすむにつれ、自殺、中絶、安楽死、末期癌患者に対する医療、脳死といったテーマについて、ロール・プレイなども含んだ学習をおこなう。

3. 大学生のためのデス・エデュケーション

体系的に幅広くデス・エデュケーションの講義をおこなう。社会学や心理学などの講義の中でも、デス・エデュケーションにふれることもできる。

4. 中年期におけるデス・エデュケーション

多くの中年は、毎日の仕事や生活に忙しく、死について考える余裕がない。一方この年代は、癌に罹患する割合が急速に増えてくる。癌ではないと説明されていても、体の衰弱とともに、回りの者に、不信やいらだちを、怒りを持つだけである。また中年の自殺が最近増えている。このような中年期の危機は、デス・エデュケーションを受講する絶好の機会である。現在、普及しつつある生涯教育講座の中に、死への準備教育の特別コースを設けることが是非とも望まれる。

5. 老年期におけるデス・エデュケーション

老年期はデス・エデュケーションの最後の機会である。死のことは考えたくないで、これまでずっと死から目をそむけてきた人にとって、死が近づいてもどう対

処していいかわからない人が多い。人生のこの段階におけるデス・エデュケーションは、具体的なアドバイスとしてなされるべきである。すなわち、いかにして死に備え、未解決の問題に決着を付けるか、残される家族のためになにをすべきか（遺言作成、葬儀の手はず、法律的問題の処理、経済的な配慮など）、親しい人々にどのように別れを告げるか、といったことである。

6. 医療関係者のためのデス・エデュケーション

患者の死を日常的に体験しなければならない医療関係者は、しっかりした死生観を持つことが望まれる。ターミナル・ケアの場において患者に適切なケアを施すためにも、医師や看護婦は死に関係する様々な問題を学び、なおかつ死に対する自分の個人的な姿勢をも検討する必要がある。ターミナル・ケアに携わる人にとって、デス・エデュケーションは必修の課程である。

以上デス・エデュケーションの方法についてみてきたが、死を学ぶことに関しては、教室の中ばかりでなく、家族や地域の人々との接触を通してなされることが大切である。書物や教師ばかりでなく、医師や法律家、宗教者、葬儀担当者などを実際に訪ね、そこから情報や知識を得るようにする。デス・エデュケーションの方法で大切なことは、一方的に教えるのではなく、みんながそれに参加し、ともに話し合い、考え感じる事が出来るようになることである。

C. デス・エデュケーションの内容

先に述べたデス・エデュケーションの目標、方法にも関連するが、デス・エデュケーションの内容について、以下にその項目をあげてみたい。

1. 死へのプロセス：死にゆく患者の心理、死の受容、死の意味、死の定義、死の判定
2. 子どもと死：死の概念の発達モデル、死にゆく子どものニーズ、死にゆく子どもの両親、子どもに死について話すこと、乳幼児突然死症候群
3. 思春期から老年期までの死の概念：エイズ、中年期の危機、死の恐れ、遺言、死に場所
4. 死にゆく患者への援助：ターミナルケア、ホスピス、QOL、病名告知
5. 死別と悲嘆：悲嘆のプロセス、遺族の援助、支援グループ
6. 葬儀：葬礼の文化的意義、喪の慣習、埋葬
7. 哲学や宗教と死：哲学や宗教からみた死の解釈、死後の世界、臨死体験
8. 死と文化：美術、音楽、文学における死
9. 自殺とその防止：自殺に関する理論、自殺のサイン、子どもの自殺、思春期の自殺、老年期の自殺

10. 中絶と安楽死：生命の尊厳、積極的消極的安楽死、脳死、臓器移植、法律的倫理的問題
11. 殺人と戦争：悲惨な死別とその援助、大量虐殺、核戦争

これ以外にも、デス・エデュケーションで取り上げてもよい内容は、いろいろと考えられると思う。

V. おわりに

今世紀ほど人類が大量の死を経験したことは、歴史上まれであろう。二つの世界大戦によって、おびただしい数の人々が死んでいる。第二次世界大戦では、何百万というユダヤ人が殺された。広島と長崎への原爆投下によって、一瞬のうちに数十万の人々が死に、かろうじて生き延びた人は今でも後遺症で苦しんでいる。もちろんこのほかにも、数え切れない人々が戦争の犠牲になっている。

今の日本の社会は平和であるが、死は常に私たちの身の回りにおきている。それは癌などの病気による場合もあるし、事故や震災による場合もある。しかし、私たちは死を直視することを避けようとする。一方、死は私たちに必ず訪れる現実である以上、死と向き合いその準備をしておくことは大切なことであろう。そして、世界中のすべての人々が、死を前にしては平等であるという認識を持ち、共に支え合って生きていけるように、今後デス・エデュケーションが広まることが望まれる。

【引用および参考文献】

- 柏木哲夫 1995 死を学ぶ 有斐閣
 藤森和美、藤森立男 1995 災害を体験した子どもたち—危機介入ハンドブック— 北海道教育大学函館校人間科学教室
 アール・A・グロルマン 1992 死ぬってどういうこと 春秋社
 アルフォンス・デーケン 1986 死への準備教育の意義 アルフォンス・デーケン編集 死への準備教育第1巻 死を教える メヂカルフレンド社
 若林一美 1986 アメリカにおけるデス・エデュケーション アルフォンス・デーケン編集 死への準備教育第1巻 死を教える メヂカルフレンド社
 樋口和彦、平山正実 1985 生と死の教育 創元社
 ロバート・フルトン編著/斎藤武・若林一美訳 1984 デス・エデュケーション 現代出版
 キュブラー・ロス著 続死ぬ瞬間 読売新聞社

(臨床老年行動学講座 助手)